



臨床実習前の医学部医学科4年生へ 先輩医師からのメッセージ

『夫婦で協力して子育てもキャリア形成も』

消化器・小児外科 平下 禎二郎 医師
消化器内科 平下 有香 医師

キャリア教育では初めての試み、ご夫婦でご講演いただきました。

ご夫婦ならではの軽妙なやり取りでそれぞれのキャリアパスやワークライフバランスの実践について紹介され、そして学生への将来のキャリアパスについて「現在の臨床研修制度では自由な研修が可能となり自分なりの成長ができるが、その分自己責任が求められる。自分の性格や特徴を考えて、自分の成長する姿をイメージしてふさわしい場所、やりたいと思ったことを続けていくことが大事」と話されました。さらに『勝手に質疑応答』として「結婚・出産はキャリアに影響するか」「夫婦での留学はできるのか」についてお二人の経験に基づいたアドバイスをいただきました。夫婦での共同研究や名を連ねた英語論文もかっこいい！医学科カップルにも眩しく映ったことでしょう。

また昨年留学先のニューヨークにご家族で行かれた際に直面したコロナ禍や大統領選挙、目の当たりにした人種差別の抗議デモの様子などの貴重なお話もいただきました。



息の合ったご夫婦での講演



男性医師では初の長期育休取得

『育児休業（育休）ではなく育児勤務（育勤）』

循環器内科（高度救命救急センター）米津 圭佑 医師

5月に第1子と第2子（双子）が生まれ、2児の父となった米津先生。1人でも大変なのに新生児が2人となると、夫婦の協力は欠かせません。共働きの奥様の負担を少しでも減らしたいと、上司の理解もあり、男性医師として珍しい1ヶ月の育休を取得されました。

育休のメリットとして、子どもとの大事な時間の共有により父親としての自覚が芽生えたこと、周囲の人への感謝の気持ちが生まれたこと、オンオフのメリハリが働き時間をも有効に活用できるようになったこと、をあげられました。デメリットとしては、収入の減少、皆が取得できない不平等感があること、制度として普及していない点を指摘しました。「育休は育児休業ではなく育児勤務（育勤）」との言葉もあり、「社会として子育てを支援する体制が必要」また「自分が取得したことで続いて他の先生にも取得してほしい。そのためのサポートも行いたい」と話されました。

『人生の転機に応じたギアチェンジを』

血液内科 高野 久仁子 医師

「私がキャリア形成の過程において考えていたこと、感じたことをお話しすることで将来に役立てていただきたい」と登場された高野先生。血液内科のお仕事について、国内留学で学んだこと、ご主人との出会い、2児の母親になってみてどのような毎日常、赤裸々にお話ししてくださいました。「こんな医師になりたいという思いを大切にしてもらい、実際に飛び込んだ時に感じたこと、素直にやりたいことを自分自身で選択してほしい。人生の転機に応じて理想像を柔軟にアップデートしていくことも重要。全力でも難しいと思うときはギアチェンジをしてもいいと思っている。」と医学生へメッセージをおくりました。最後に「男女問わず仲間の選択を尊重し、みんながhappyに働き続けられることを願っています。」と締め括られました。



人生相談にも乗ってくれそうな優しい笑顔の高野先生



楽しく学んで

「ワクワクライフバランス」な人生を！

『臨床も研究も興味を持って leap before you look（見る前に飛べ）！』

心臓血管外科 宮本伸二教授

佐伯市のご出身で、出身大学も主な勤務地も大分県ということもあり、「地産地消心臓血管外科医」を名乗る宮本先生は、ご自身のキャリアを、趣味の範疇を超えたイラストを活用したスライドで紹介されました。実は、宮本先生は医療雑誌での3コマ漫画連載や、自らイラストを書いた術書を出版されたこともあるプロのイラストレーターでもあるのです。

医局に入ってから教授になるまでの間、術中心臓を冷却するための氷かきから始まった下積み時代から、初の執刀で奥様がお赤飯を炊いてくれた心温まるお話、コネもお金もあてないところからスタートした留学の話、その時書いた英語の履歴書の失敗エピソードなどで講義室は笑いに包まれました。

また、大学の医師の悩みの種である英語論文や科研費も、可愛いヤギのイラストなどを入れることで？見事に何本もアクセプトされる宮本教授のお話を聞くと、論文作成や研究費申請書類の作成も楽しくできるんじゃないか！？と思えちゃいました。

最後にみんなに「何事にも興味を持って当たって砕けるくらいの精神でいってほしい」とメッセージを送られました。

【ワークライフバランスミニ講座】

腎臓内科 中田 健先生(女性医療人キャリア支援センター副センター長)によるワークライフバランスミニ講座では、過労死や過度の連続勤務による医療事故などをきっかけに働き方の見直しや医療安全につながるチーム医療の重要性など、時代の変遷によるキャリアの考え方の変化やワークライフバランスが大切とされる理由についての話がありました。

さらに男性医師の育休取得状況について中田先生が発起人となっている男性医療人パパの会についても紹介されました。



キャリア教育の中で 学生によるグループ討論の時間

学生は各班でケーススタディを行い、ロールプレイをしました。与えられた短いキーワードをもとに想像力を働かせてシナリオを作り、妻、夫、子ども、上司、実家の親などの役割を決めて演じました。さまざまな立場で、いろいろな考え方があることを学ぶきっかけに。さらに、男性の育児休業や、病児保育に関する情報収集を行い、社会の制度についても触れることができました。

キーワード1：

研修医の時に結婚・出産した若い医師同士の夫婦。

キーワード2：

夫婦共働き、2歳の子供の朝の急な発熱。二人とも県外出身。

キーワード3：

夫が、講演会、当直、学会、研修医との飲み会など連日不在。子供は1歳、3歳。妻はくたくた。

キーワード4：

妻が上司より海外留学を勧められた。

キーワード5：

夫は単身赴任中。国際学会で発表予定。預ける予定だった母が入院。

キーワード6：

一般企業に勤める夫と結婚した女性医師。育休から復帰した。



熱演ありがとうございました！
対面講義が許されたこの時期、
講義室には笑いが溢れました。



臨床実習前の手洗い実習にて

この後、クリニカルクラークシップが開始となり医療現場に旅立った4年生たち。医学を学ぶと同時に、いろんな先輩医師の働く様子を見つつ、機会があればキャリアに関する質問をしてみるのも良いかもしれません。

「キャリア教育」ってご存知でしょうか？

2021年11月16日、挟間キャンパス臨床中講義室で「医師のキャリアとワークライフバランスを考える」キャリア教育が行われました。臨床実習開始直前の医学科4年生を対象とした『臨床実習入門総合医学』の一環であるこの授業は、『医師のキャリア継続のため、ワークライフバランスの考え方を知るとともに、医師としての多様な生き方があることを学ぶ』ことを目的としており、今年で6年目になります（医学教育センター中川幹子先生）。



『キャリア教育』とは・・・

様々な選択肢のある岐路に立たされた時に、自らのキャリア形成や、ライフイベントとの兼ね合いをどのように選択していくのかを主体的に考えてもらうことを目的としています。

『ワークライフバランス』とは・・・

「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会（内閣府）」と定義されています。「生活」と「仕事」の取捨選択ではなく、「生活」と「仕事」の両立から「相乗効果」を生むということどどちらかを犠牲にすることではありません。これに対する取り組みの一部として、子育て支援や男女均等推進が挙げられます。

キャリア教育はこのようなスケジュールで行われました

「キャリア」「ワークライフバランス」という学問を1日使って楽しく勉強。これが現代の「キャリア教育」です。

時間	内容	担当
9:00～	講義説明 アンケート、グループワーク説明	医学教育センター 中川幹子先生 医学生物学 松浦恵子先生
9:15～	キャリア教育①②	消化器・小児外科 平下禎二郎先生 消化器内科 平下有香先生
9:55～	キャリア教育③	循環器内科 米津圭佑先生
10:15～	ワークライフバランスミニ講座	腎臓内科 中田健先生
10:25	移動	校舎講義棟1Fチュートリアル室へ
10:30～	学生によるグループ討論	8～9人のグループに分かれ、今後起こりうるキーワードを基に各グループ毎にシナリオを作成。問題点の解決策を討論する。
12:00～	休憩	
13:00～	キャリア教育④	血液内科 高野久仁子先生
13:20～	キャリア教育⑤	心臓血管外科 宮本伸二先生
13:40～	学生による発表会	司会 耳鼻咽喉科 立山香織先生 各グループ、午前中に作成したシナリオ及び解決策を3分のロールプレイで発表
14:50～	講評・総括	医学生物学 松浦恵子先生 医学教育センター 中川幹子先生 腎臓内科 中田健先生
15:00	終了	

第5回ヘルスケアダイバーシティ学会が開催されました

2021年11月3日（水・祝）に大分市内で第5回日本ヘルスケアダイバーシティ学会が開催され、松浦恵子センター長が大会長を務めました。日本ヘルスケアダイバーシティ学会はヘルスケア分野におけるダイバーシティについての調査と研究を行い、ダイバーシティ経営を普及する目的で2017（平成29）年に設立されました。

今大会では『次世代医療人のダイバーシティ』をテーマに今後のヘルスケア業界の動向を抑える上で必要不可欠なSDGsや様々な人材が能力を最大限発揮できる組織づくりのためのダイバーシティ経営について講演やシンポジウムが行われました。



松浦恵子大会長

中田健医師



立山香織医師

本学会の代表理事である岡敬二理事長による開会あいさつ、北野正剛大分大学学長による来賓あいさつに続き、大会長講演では松浦センター長より「医学部学生の意識等」「大学での取り組み」「次世代医療人に求められるものとその方策」についてお話がありました。

SDGsの権威である馬奈木俊介九州大学大学院工学研究院主幹教授 / 都市研究センター長の特別講演、石井富美 多摩大学医療・介護ソリューション研究所副所長によるランチョンセミナーの後、午後からのシンポジウム『次世代につながる医療人のダイバーシティ』では、松浦センター長を座長に副センター長の中田健医師、立山香織医師がシンポジストの一員として登壇しました。シンポジストの発表では中田副センター長が男性医療人パパの会の活動や男性医師の育休促進など環境改善について、立山副センター長が女性医師交流会、キャリアパス相談会といった交流会を通じたキャリア支援などの取組を発表しました。パネルディスカッションでは、次世代の医療を担う人材が安心して個々の能力を発揮できる業界にするために必要なことについて会場やオンラインでの質問を交えながら議論が交わされました。

大分大学医学部小児科学講座 医局長 岡成和夫医師にインタビュー — 男性育休所得率が100%に「育児休業もキャリアの一環」 —

小児科が進めている働き方改革は医療情報サイトでも紹介され、注目を集めています。岡成医局長にお話を伺いました。



— 小児科は男性医師の育休取得率が100%だそうですね。

3年前から「育休をとろう!」と取り組みを始め、以降の男性育休取得率が100%です。

— 育休はどのくらいの期間ですか？

大学が認める5日間の育児休業に加え、有給休暇1週間と土日をセットで2週間連続した取得を推奨しています。可能なら1、2か月取れると良いですが、現実的に可能な2週間から始めました。これから続く「育児」に携わるきっかけにしたいと思っています。取得した人からは、「取ってよかった。」「『自ら手を挙げて休む』ということは難しいので、取るように言ってもらえてよかった。」と好評です。

— 一周周りや上司の反応はどのようにですか？

周囲の小児科医は「小児科はそういうものだ。」と思っています。育児休業だけではなく、運動会や参観日、交通当番などで休む人もいて、育児休業が特別ではありません。（上司の反応については）理解のある先生方ばかりです。

— 「育休を取りたくない。僕は仕事をしたい。」という先生はいましたか？

2週間でもキャリアが遅れる、もっと働きたいと思っている若手も当然います。しかし、自分の子の育児をするのはその瞬間しかありません。後からしたくてもできないので、小児科医のキャリアとして育児に積極的に参加することを推奨しています。子育てに参加することで、お父さんお母さんの苦労や喜びを直に感じることができるとしています。育休後に、「育休に対する考え方が変わりました。」との言葉もありました。

男性の育児休業だけではなく、医局員ひとりひとりの多様な働き方を認めあえる職場の環境作りが大切だと思っています。

小児科のホームページで私たちの『働き方』の取り組みを発信しています：<https://www.oita-ped.jp/>